## 時事新報

# 對韓貿易

朝鮮の開港を促がし條約を結びたる者は日本にして地の相距る甚だ近く往來交通も便利にして其事情を審にするの點に於ては日本人の右に出づる者なかる可し左れば日韓の貿易は既に著しき發達を示す可き筈なるに實際に於ては殆んど進步の徵を見ず明治十四年に於て我より彼に輸入したるもの百九十四萬餘圓、同十五年には百七十七萬餘圓、同十六年には二百二十四萬餘なりしに爾來頓に衰退して年々四五十萬圓の間を往來し同二十六年に至るも僅かに百三十萬圓に過ぎざる其傍に於て朝鮮貿易に就ては後進生とも云ふ可き支那商人は次第に步を進めて次第に商權を握り俗に所謂後の烏が先になりて我を凌ぐに至りしは日本商人の不面目と云ふ可し蓋し朝鮮の如き國に於ては政治上に勢力を有するに非ざれば安心して商賣に從事し難き事情もある可きに支那は豫てより之を屬邦視して其内治外交に干渉し自國商人を安心せしめて自から其羽翼を伸ばさしめたるの意味もある可し我商權の伸びざりしも故なきに非ざれども今や形勢一變して朝鮮の政治上に支那の權力は殆んど皆無となり日本は代て之を誘導するの大任を引き受け半嶋の朝野に日本人の勢力は固より前日の比に非ざるに然るに日韓の貿易は依然舊態を改めず商人は殆んど之を度外視するが如くにして戰爭前も今日も敢て異なる所あるを見ざるは遺憾と云ふ可し英國の東洋貿易を見るに政治上の勢力一步を進むれば商權亦一步を進め兩々相駢進するのみならず商人先づ進で政府の保護之れに伴ふの趣さへなきにあらざるに我の朝鮮に對するや政治上の勢力は長足の進步を爲したれども貿易は寸步も發達の徵候を示さゞるは獨り政權を重んじて實益を輕んずるに由るか假令ひ政權を握るも實益を收めざれば其權力は半ば空權となる可し或は半嶋國の風雲は尚は穩かならずして今後の成行き測る可らざるものあれば商人も安心して大に乘り出すを得ずとの說もあらんかなれども支那の商人は朝鮮に於ける支那の權力殆んど皆無に歸したるも戰雲の收まるや否や續々歸來して以前の商權を回復しつゝあるに政治上に於て支那に代りし日本の商人が尚は前途を氣遣ふて躊躇するを得ずとは意氣地なき限りと云はざる可らず支那朝鮮は世界中最も抵抗少なくして過利多き所なれば政治上に於て爭奪の中心と爲ると共に商賣上に於ても亦爭奪の中心となり恰も河川の水の低所に向て奔流し來るが如く利を爭ふ者は世界の各方面より集中して風波いよ〳〵激しかる可きは當然のみとなれば日本の商人にして所謂食はず貧樂に安ずる覺悟ならば夫れまでなれども苟も共に利益を爭はんとならば一步にても先きに風波の間に漕ぎ出して勝負を決するの勇氣なかる可らず況して政治上の勢力も或る意味に於ては商賣上の勢力に伴ふの習にして商賣の王にして政治上の奴隷たる例はなきことなれば政治上の勢力に[illegible]の要あらば商人は尚は更ら奮發して商賣[illegible]より政權を握るの地歩を作らざる可らず[illegible]以て朝鮮の貿易は一日も等閑に附す可らざるものと斷ずるなり

## 電報

### ○混成旅團の戰況及其他の動靜

十月廿三日午前十時五分 臺北發
同二十七日午前二時五十五分大本營着

一、南進軍の司令部は十九日茅港尾に二十一日に看西街に達し二十二日に臺南に入る

一、近衛師團は十九日敵の抵抗を受くることなく茅港尾東方なるチウシヤレヨウ附近に二十日曾文庄附近に達す師團は曾て一枝隊を大人廟大崎方向に又一枝隊を看西方向に差遣したり

三、十五日元混成第四旅團は先頭を以て急水溪右岸に達す

十八日步兵第五聯隊(二中隊欠)砲兵一中隊工兵一小隊騎兵若干より成る一枝隊はヲヤト附近にありし五六千の敵を擊退し敵の一部は臺南方向に退却し一部は海に排擠せられたり**此戰我死者三名負傷十五名内將校はムクノ**(不明)**矢野兩步兵大尉ウノニ**(不明)**佐藤、石川の三步兵少尉、敵の死者四百**而して砲四門を奪取せり

十九日旅團は復た蔴豆附近に於て再び敵に出會し之を擊退して同處を占領せり此戰に於て**我兵即死二負傷五、敵の死者約六十**

二十日旅團は曾文溪の右岸に於て防禦工事をなして敵の陣地を攻擊したり此戰に於て旅團長貞愛親王殿下は自ら豫備隊を率ゐて曾文溪を徒涉し猛烈に敵の右翼に迫り遂に此陣地を略取せり

敵は弼字中軍にして約四千マウゼル連發銃を携帶せり**此戰我死傷即死兵卒二、負傷吉井海軍少佐**(極めて輕症)**小川步兵大尉**(生命に別條なし)**下士以下九、又敵の死者二百四、**第二師團の一部は二十一日臺南に入れり是より先き師團は一枝隊を小崗山を經て鹽水港方向に派遣したり

四、打狗にありし艦隊より派遣せる西京丸は安平沖を巡視する際十六日安平砲臺より約六千米突に接近せしとき是より砲擊を受け其一彈は起重機に中れり然れども負傷者なし艦隊は二十日頃安平沖に在り

五、臺南の狀況に關しては未だ詳細の報に接せず

臺灣 樺山總督

參謀總長宛

### ○諸軍臺南に入る、宣教師の希望住民の歡迎

十月二十三日午後五時三十分臺北發
十月廿六日午前十一時卅分大本營着

二十日第二師團は二層行に於て敵兵約五六百を擊退し其百餘名を射殺せり此日**外國宣教師土地の信者を率ゐて第二師團の所在に到り告ぐるに十九日の夜に乘じ船にて劉永福は其部下と清國に逃れたることを及び臺南には敵なきことを以て城内の秩序整理のため我軍隊の城内に入ることを望めり**此に於て師團長は山口少將の率ゐる一枝隊を派遣せり此枝隊は**二十一日住民に歡迎せられて臺南城に入れり**

元混成第四旅團は二十一日船仔頭に達す此旅團の右側枝隊なる步兵第五聯隊(二中隊欠)砲兵一中隊とより成る一枝隊は曾文溪附近に於て約三千の敵を攻擊し**敵を斃すこと千百餘人此戰に即死レイゼイ**(不明)**少尉及び下士以下八、負傷二十一**

二十一日近衛師團は長春庄に達せり

**二十二日高嶋副總督近衛師團長及び乃木第二師團長と皆臺南に入り諸軍隊は目下城外に在りて整頓中なり**爾後一枝隊を運送船にて恆春に送り該所の鎮壓に從事せしめんとす前日來南進軍に屬する南北兩師團は殺癘の猖獗と道路の不良及び給養の至難なるにも拘らず能く之に堪へ步々敵を擊退し終に二十一日に至り臺南に於て連絡し同所の占領を確實にすることを得從て臺灣南部の鎮定略々其目的を達することを得たり

臺灣南部鎮定に關し最終の報告は本職臺南に至り該地方の情況を實察したる後之を進呈せんとす

臺灣 樺山總督

參謀總長宛

### ○劉の遁走、英獨軍艦の注意

十月廿三日午前十一時半臺北發
同廿六日午後八時五十分大本營着

在安平有地艦隊司令長官よりの報告によれば二十日午後二時安平沖警戒中**英獨兩國の軍艦及領事館員より劉永福は十九日の夜若干の部下を以て三艘の支那船に乘り遁走し居留地は敗兵の亂暴を恐れつゝ在りとの報**に接したるを以て二十一日早朝より艦隊を以て安平砲臺に迫り陸戰隊を上陸せしめ間もなく該砲臺を占領せり陸戰隊上陸の際海岸に於て微弱なる敵の抵抗を擊退し**敵四名を斃したり我に死傷なし**第二師團は二十日午後二層行迄達せるを以て之と連絡せり

廿三日午前十一時卅分 樺山總督

參謀總長宛

### ○劉の捜索、安平砲臺の降兵

十月二十四日午後發電
同二十六日大本營接電

十月十九日夜劉永福手兵を率ひ逃亡せりと我艦隊に報ぜり安平沖は嚴重に看守するを以て多分各西港の方に沿ふて遁れたるならん同方面は兼て其防禦をなしありしも**猶は軍艦を増し捜索中**なり

二十一日早朝より艦隊は吉野、秋津洲、浪速、濟遠を以て安平砲臺に迫り陸戰隊を上陸せしめ甲乙砲臺共占領したり右占領の結果として**約五千の敗兵兵器を捨て、降參せり是等**